

地元産の魚よ育て

県内初 ヤマメ親魚放流

桐生市内で実証試験

県水産試験場は8日、両毛漁業協同組合(中島淳志組合長)が管理する桐生市内の河川で、産卵間近のヤマメの親魚45匹を放流した。他の場所で生まれた稚魚を放流するの比べ、その川で生まれ育った魚のほうが生存率が高いとされ、魚の新たな増殖法として注目されていることから、県が初めて実証試験として行ったもの。今後は産卵や稚魚の成育状況を観察し、その有効性を検証する。

県水産試験場と両毛漁協

川で産卵、増殖に期待

河川環境の保全や水産資源の確保を図っている漁協にとって、魚の増殖は重要な役割。現在は稚魚放流が中心だが、近年は、他の場

所で養殖された稚魚や成魚を放流するより、その川で自然繁殖した魚のほうが生存率が高いとの研究報告があり、費用対効果の面か

らも、親魚放流の有効性が注目されている。これにいち早く着目した両毛漁協は昨年、渡良瀬川で自主的に親魚放流を行った。こう

した動きを受け、県が初めて実証試験を計画。日本釣振興会県支部(柏瀬廠支部長)も資金協力し、同漁協管内の渓流で実行することになった。既存のヤマメを事前に捕獲し、魚がない



状態にした一定区間に、県水試の箱島養鱒センター(東吾妻町)で全長約40センチ、重さ7

50センチほどに育った産卵間近のヤマメの雌15匹、雄30匹を放流。背中に黄色いタタをつけ

産卵間近のヤマメの親魚を放流する関係者。稚魚放流より高い増殖効果に期待がかかる(桐生市内で).....
て目立ちやすくしたこれらの親魚を産卵適地の3カ所に放流した。関係者は9日以降、密漁に目を光らせながら親魚を観察し、産卵状況や増殖効果を検証する。県水試の松原利光独立研究員(41)は「水産資源を増やす有効な増殖方法の一つとして実験し、効果を検証したい」と話す。

中島組合長(42)は、「稚魚放流と並行して、魚の生存率が高いとされる親魚放流を今後の放流計画に取り入れたい。漁協単独で昨年行ったが、追跡調査はできていないので、県による調査研究を通じて、増殖効果を実感できるはず」と期待する。